

徳島県勝浦町でアカギカメムシを確認

山田量崇¹・兼田武典²

[Kazutaka Yamada¹ and Takemichi Kaneda² : Discovery of *Cantao ocellatus* (Thunberg) from Katsuura-chô, Tokushima Prefecture, Japan]

はじめに

アカギカメムシ *Cantao ocellatus* (Thunberg, 1784)は、キンカメムシ科に属する美しい大型のカメムシである。体は紅色から橙黄色の色彩を呈し、前胸背板と小楯板には、乳白色に囲まれた黒い斑紋が散在するが、それらは変異が大きい。本種はアカメガシワなどの寄主植物上で、時に群生し、雌成虫は産卵後に卵塊を保護する習性をもつことが知られている（安永ほか, 1993 など）。

南西諸島から東南アジアおよびインドにかけて広く分布する種であるが、日本ではしばしば九州や四国、本州から確認されている。宮武・伊賀（1968）によると、本種は1950年代に屋久島（1952年）、種子島（1958年）、鹿児島県佐多岬（1959年）から相次いで確認され、1967年には四国から初めて発見・採集された。九州においては、北九州市門司（奥村, 1984）、福岡県英彦山および長崎県西彼杵郡（安永, 1991）から記録され、最近でも福岡県前原市から発見されている（藤原, 2003）。本州では、2003年に山口県光市で初めて発見され（重中, 2004）、時を同じくして、東京都荒川区からも見つかった（小川, 2004）。

今回、徳島県勝浦町にある徳島県立農林水産総合技術支援センター果樹研究所に隣接するミカン園にて、本種が温州ミカンの葉裏に群生しているところを発見したのでここに報告する。

本文に入るに先立ち、本種に関する貴重な情報を提供していただいた高知県の高井幹夫氏と高知大学農学部の荒川良博士、徳島市の加藤雅史氏に心からお礼申し上げる。

四国における記録

四国における最初の記録は、1967年7月に高知県幡多郡大月町で採集された個体である（宮武・伊賀, 1968）。その後、しばらく記録が途絶えていたが、1995年に愛媛県南宇和郡内海村（現、愛南町）で1個体採集された（酒井ほか, 1998）。1999年には再び高知県にて発生が確認されている（高井ほか, 1999）。高知県での記録はいずれも西南部であるため、南

2010年1月31日受付, 2月25日受理。

¹ 徳島県立博物館, 〒770-8070 徳島市八万町文化の森総合公園. Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-chô, Tokushima 770-8070, Japan.

² 徳島県立農林水産総合技術支援センター果樹研究所, 〒771-4301 徳島県勝浦郡勝浦町沼江. Tokushima Agriculture, Forestry and Fisheries Technology Support Center, Fruit Tree Research Institute, Nue, Katsuura-chô, Tokushima 771-4301, Japan.



図1. アカギカメムシ，成虫.

西諸島あるいは九州南部からの飛来個体が確認されたものか、あるいはその次世代が発生したと考えられていたようだが、1999年の発生は数千頭にもおよぶ大集団を形成しており、それまでの発生状況とは明らかに異なっていたことから足摺半島周辺では定着したと結論された（高井ほか，1999）。それ以降、高知県では足摺半島を中心に毎年発生しているようである（高井私信）。しかしながら、徳島県と香川県からはこれまで記録がなかった。

発見時の状況

兼田は、2009年10月17日に、果樹研究所に隣接する温州ミカン園で大型の派手なカメムシが温州ミカンの葉に集団で付いているという情報を得て現場で確認してみたところ、葉に数個体のアカギカメムシが付いているのを発見した。発見当時、1本のミカンの木に30前後の個体が葉などに集団を形成していたようだが、発見者がミカンの害虫であると勘違いして害虫スプレーで駆除しようと試みたため、驚いたアカギカメムシの集団は分散してしまったようである。発見した木以外からは見つからない。

10月21日に、山田が現場に行って調査したものの、すでに分散した後で、数本のミカンの木からアカギカメムシ数個体を確認しただけであった。

[検視標本]

4♂♂，8♀♀，徳島県勝浦郡勝浦町沼江，2009年10月17～21日，山田量崇&兼田武典採集（図1-2）。これらのうち、前胸背側角に顕著な棘を有する個体は2♂♂，2♀♀であった。

発見された場所は、海岸から10kmほど離れた標高約150mの山間部で、スギ植林と竹林に囲まれた温州ミカン園である。北東向きの山の斜面にあり、風の影響はよく受けられる。周囲はスギ植林と竹林で構成されているが、ところどころ照葉樹が混在しているよう



図2. 温州ミカンの葉に止まるアカギカメムシ成虫.



図3. アカギカメムシが確認された温州ミカン園（徳島県勝浦郡勝浦町沼江）

な環境である。本種の寄主植物となるアカメガシワは見あたらなかった。

考 察

本種の寄主植物として、アカメガシワの他にウラジロアカメガシワ、オオバギ、カキバカンコノキ、アブラギリ、オオサザンカなどのトウダイグサ科植物が知られている(安永ほか, 1993)。このことから、温州ミカンが寄主植物とは到底考えにくく、偶然飛来して集まった

であろうことが推察される。本種はしばしば長距離移動することが知られており、南方定点の気象観測船でときどき捕獲されているようである（安永ほか，1993）。同じキンカメムシ科のオオキンカメムシ *Eucorysses grandis* (Thunberg, 1783) も移動性が高いことがよく知られているため、本種の飛翔能力もかなり高いことが推察できる。高知県ではほぼ毎年発生しているとのことから（高井私信），徳島県勝浦町で確認された個体は，高知県あるいは県南部で発生したものが飛来したのか，あるいはその次世代個体の可能性が考えられる。県南部での発生を示唆するデータとして，2009年9月1日に加藤雅史氏が徳島県美波町日和佐で1個体確認していることが挙げられる。このことから，勝浦町に突然飛来してきたと考えるより，高知県から県南部へ侵入し，徐々に北上してきたと考えるのが妥当であろう。今回の発見が偶発的なものかどうか，県南部を中心に本種の発生を調査したい。

なお，本種は前胸背側角に鋭い棘を有する個体が生じることがある。安永ほか（1993）によると，それらの出現頻度は日長によって決まるとされ，東南アジアなどの熱帯地域ではほとんどの個体が棘を備えるらしい。一方で，南西諸島では棘を有する個体は少ない。山口県で発見された大部分の個体には棘が認められており（重中，2004），1983年の北九州市における個体や1987年の福岡県英彦山における個体も棘をもっていた（奥村，1984；安永，1991）。今回の徳島での個体は12個体中4個体が棘を備えていた。サンプル数は少ないものの，南西諸島の個体群よりも棘の出現頻度は高いらしい（高井私信）。熱帯地域では棘をもつ個体が大部分を占めるようだが南西諸島では出現頻度は少なく，さらに九州以北での記録では棘が生じる個体が多く含まれることから，重中（2004）で示唆されているように，棘の出現頻度を決定しているのは日長だけではないかもしれない。

引用文献

- 藤原宏樹．2003．福岡県におけるアカギカメムシの採集記録．月刊むし，(384)：43．
 宮武睦夫・伊賀幹夫．1968．四国西南端でアカギカメムシを採る．昆虫，36：98．
 小川 正．2004．東京都荒川区でアカギカメムシを採集．月刊むし，(395)：45．
 奥村正美．1984．北九州におけるアカギカメムシの採集例．北九州の昆虫，31：46．
 酒井雅博・大林延夫・吉原一美・相田和博・岡田圭司・吉道俊一・矢野真志・小野浩司・小西伴尚．1998．
 愛媛県南宇和郡内海村の昆虫類 (I)．愛媛大学農学部紀要，42(2)：167-190．
 重中良之．2004．山口県でアカギカメムシの終齢幼虫コロニーを確認．月刊むし，(395)：40-41．
 高井幹夫・河上友三・中山紘一・別府隆守・熊沢秀雄．1999．足摺半島におけるアカギカメムシの大量発生．
 げんせい，(74)：52．
 安永智秀．1991．九州本土におけるアカギカメムシの記録2例．Rostria，(41)：67-70．
 安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫．1993．日本原色カメムシ図鑑．全国農村教育協会，
 東京，380pp．